

Eric Tagliacozzo

Secret Trades, Porous Borders: Smuggling and States along a Southeast Asian Frontier, 1865–1915

山本博之

I 本書の構成と内容

ナショナリズムをいかにして民族¹⁾から解放するか。これは東南アジアの人々の、そして東南アジア現代政治研究の大きな課題であり続けた。それへの答えの1つが、民族ではなく「領域」によって規定されるナショナリズムである。特定の民族を中核とする政体が形成された後に国民国家形成がなされた他地域と異なり、東南アジアの多くの地域では、従来の民族社会の境界と無関係に植民地化により領域国家がもたらされ、その枠組のもとに国民国家形成が試みられた。では、そのように形成されたナショナリズムにおいて、その担い手は民族と同等のものになり得るのか。本書は、この問題意識を念頭に置きながら、海域東南アジアという枠組における統治空間の形成を論じたものである。

冒頭の問いは最後に検討するとして、まずは本書の内容を確認しておきたい。本書が対象とするのは、海域東南アジアにおいて、植民地国家の諸制度が及ぶ範囲として立ち現れた国境と、植民地国家の管理によらず国境を越えようとする様々な動きである。1865年から1915年までの50年を対象に、アチェから北ボルネオ(サバ)に至るイギリス領とオランダ領の3000 kmに及ぶ国境を巡る活動

が描かれている。

本書は、序章以下、5つの部分に分かれている(以下、括弧内は章番号と章名を指す)。

第1部では、植民地国家に導入された諸制度として、地図・海図(2. Mapping the Frontier)、軍、海兵、警察、裁判所(3. Enforcing the Frontier)、電信、鉄道(4. Strengthening the Frontier)の発展が描かれている。

第2部の関心は人的要素に向けられる。海賊(5. The Specter of Violence)、中国人、日本人、アラブ人(6. “Foreign Asians” on the Frontier)、在地住民(7. The Indigenous Threat)など、第1部で示された諸制度への潜在的な挑戦者たちと、それに対する植民地の諸制度の対応が述べられている。

第3部では密貿易の「取引商品」に目が向けられ、アヘンなどの麻薬(8. The Smuggling of Narcotics)、偽造通貨(9. Counterfeiters Across the Frontier)、女性、奴隷、労働力(10. Illicit Human Cargoes)が扱われる。

第4部では本書の主題に関する議論が展開されている。武器の売買を主な素材として、密貿易を通じて民族間の協力や連携が見られたこと(11. Munitions and Borders: Arms in Context)、そして国境と密貿易によって海域東南アジアを「アチェから北ボルネオまで」と把握する

こと (12. Praxis and Evasion: Arms in Motion) などが論じられている。

第5部では、密貿易及びそれが植民地国家の形成に与えた具体的な事例として、1873年にオランダがアチェで海上封鎖を行った際に密貿易のかどで拿捕されたキム・バンアン丸を題材に、オランダが海上封鎖を発する過程 (13. Contraband and the Junk Kim Ban An) 及びキム・バンアン丸事件の顛末を整理している (14. Worlds of Illegality, 1873-99)。

本書の特長は、海域東南アジアを1つの統治空間として描いたことにある。本書の対象は19世紀から20世紀への転換期だが、本書で取り上げられた麻薬、武器、偽造通貨、労働力などの「取引商品」は、クレジットカードや身分証明証に形を変えて、あるいは人身取引のように同じ形のまま、100年後の現在でもこの地域で重要な課題であり続けている。

本書の関心の対象は植民地国家の諸制度であり、その現地社会への影響や現地住民の対応に関心がある読者はやや物足りなさを感じるかもしれない。例えば、北ボルネオで無理な鉄道敷設計画によって植民地財政が逼迫し、輸入米に課税したために中国人人口が減少したことや、1902年に西海岸に鉄道が完成するとゴム園が急増し、中国人による土地購入を防ぐために「原住民」区分が導入されたことなどがすべて捨象され、ボルネオ島のイギリス領側での鉄道敷設がわずか2行半の記述にまとめられている。

本書がこのような記述方式を用いているのは、個々の記述の積み重ねによる歴史的事実の解明ではなく、海域東南アジアの全体像を描くことを目的とするためである。そのため、仮に個別の記述への批判があっても、そ

れが本書の議論への批判になるとは限らない。以下では、個別の記述の検証ではなく、「アチェから北ボルネオまで」と「国境と密貿易」という本書の2つの謎かけを通じて、評者の関心に引き付けて本書の意義を検討したい。

II 海域東南アジア研究として

本書は、海域東南アジアへの近代国家の諸制度の導入を、国家ごとではない方法で描こうとしている。それが最もよく表れているのが、第4部以降で繰り返される「アチェから北ボルネオまで」(あるいは「マラッカ海峡からスルー海峡まで」)という捉え方である。

本書にはインドネシアやマレーシアなど現代の国名はほとんど登場しない。本書で最も多く言及されているのはアチェである。スマトラ島の北端に位置するアチェは、インド洋世界と東南アジア世界の結節点として重要な位置を占めている。イギリスとオランダによる海域東南アジアの植民地分割の過程で、アチェ支配を試みたオランダに対し、アチェ人は30年に及ぶアチェ戦争によって抵抗した。

海域東南アジアの政治経済を押さえる上でアチェが焦点となっていたことは、本書でも繰り返し触れられている通りである。オランダの海上封鎖による「囲い込み」が最も厳しかったのはアチェにおいてであった²⁾。オランダはアチェ戦争を契機に植民地の地図を作り、後にアチェ以外の東インド各地でも地図を導入した。また、オランダはアチェ戦争をイスラム教による戦いと捉えて統治領域でのイスラム教に関する報告を求めたため、東インドでは1873年以降にイスラム教に関する情報が増加した。東インド各地の在地有力者はアチェの様子をモニターし、アチェ側も自

分たちが参照されていることをよく理解していた。

政府によるアチェへの対応が近隣各地に波及することは、独立後のインドネシアにも共通する特徴である。特定の宗教や地方に特別の地位を与えることを否定してきたインドネシアにあって、分離独立派への対応の過程で、アチェでは鞭打ちなどのイスラミ的な要素を取り入れた刑法（1999年）や地方政党の導入（2006年）などが認められた。イスラミ的な要素を取り入れた刑法は、その後インドネシアの他の地域でも導入が検討されている。

このように、本書はアチェを海域東南アジアにおける1つの焦点地域と扱っているが、それと同時に、北ボルネオ（現在のマレーシア・サバ州）をもう1つの焦点地域としている。北ボルネオ（サバ）は、国民国家として見ればマレーシアの一部であるが、自治州として中央から政治経済的に切り離された存在である。その一方で、近隣のフィリピンやインドネシアから大量の移民を受け入れ、その一部にマレーシアの身分証明証を発給するなど、国境が「融解」している地域である。

ただし、「アチェから北ボルネオまで」を掲げた理由として、アチェが戦略的に重要な地域であることは本書で繰り返し述べられているのに対し、北ボルネオがもう1つの焦点地域である明確な理由は示されていない。したがって、「アチェから北ボルネオまで」に込められた意味をどう読み解くかは、本書の著者から読者への謎かけとなっている。

その答えはそれぞれの読者が想像するしかないが、評者には、アチェと北ボルネオ（サバ）が、外部世界との関係を対照的なあり方で国民国家に組み入れることで、国民国家の

形をとりながらもそれを柔軟に運用していること、いわば国民国家の可能性に挑戦していることと無関係でないように思われる。

アチェが海域東南アジアの焦点地域であるということは、植民地国家や国民国家などの統治制度の矛盾がアチェで紛争として現われ、その対応過程で新しい制度がアチェに導入され、それらの制度が東インド／インドネシアの他の地域にも適用されていき、さらに海域東南アジアの他地域からも参照されるという図式で理解される。この図式の焦点となるアチェの人々は、これまで他者を模倣することで他者に対応しようとしてきた。西洋植民者が近代兵器などの科学技術に現れる文明によってアチェ支配を試みると、イスラム教を掲げて外来の文明とのつながりを強調することで西洋植民者に対抗しようとした。また、植民者や独立国家の指導者がアチェの囲い込みによってアチェを支配しようとする、アチェでも自らを囲い込むことでアチェ支配を強めようとする勢力が現れた。

これに対し、植民者を含む外来者がもたらす諸制度に極めて柔軟な態度で臨んできたのが北ボルネオ（サバ）である。植民地化にもなって「境界による資格」という考え方ももたらされ、領域で規定される国民や「原住民」に特別な権利を認めながらも、独立後は近隣諸国からの移民に対して親戚のネットワークなどを通じて国籍を与えたり、華人に通婚を通じて「原住民」の資格を与えたりするなど、実践の上では「境界による資格」を解体してしまっている。

このように、境界とそれに関わる諸制度に両極端の態度をとるアチェと北ボルネオ（サバ）が、時代ごとの国家の諸制度にそれぞれ反応し、それに対応する中で海域東南アジア

における諸制度が調整されてきたという歴史過程を考えることができるかもしれない。

Ⅲ ナショナリズム研究として

本書は、題名からも想像できるように、国境と密貿易のせめぎ合いを主題としている。しかし、国境警備の担い手とそれをかいくぐって密貿易する人々の知恵比べを本書に求めるならば期待外れになる。本書はborderとfrontierをキーワードにしているが、本書におけるborderは領域統治とほぼ交換可能であり、frontierとは領域統治が十分に及んでいない状態を指していると理解すべきである。西洋人も密貿易に関わっているとの指摘があるように、本書で描かれているのは植民者と在地住民・外来住民の競合ではなく、植民地国家の国家意思なるものとそれに関わる人々の関係である。その意味では、本書に例えば「海域東南アジアにおける植民地国家建設」という題名がついていたとしても、大きな違和感はなかったかもしれない。

では、なぜ本書は「国境と密貿易」をテーマに掲げているのか。この謎かけに、ナショナリズムの発展史として描かれてきた東南アジア現代政治史をいかに民族から解放するかという著者の問題意識を見ることが出来る。

ここで民族とは言語などの文化的標識によって他と区別しうる人々を指す。この理解に従えば、すべての民族は固有の言語を持つことになり、すべての人が公私いずれの場でも母語を使えることが民族間の平等をもたらすという考え方があり得る。

これに対して、言語的にも宗教的にも多様な混成社会である東南アジアで民族の自決を考えた場合、個別の言語集団に文化的自治を与えることは現実的ではない。そこで生まれ

たのが、領域をもとに統治空間を立ち上げ、それを自決の単位とする考え方である。

では、そのような自決の単位となる統治空間の構成員は互いに心理的紐帯を持ちうるのか。この問いに対しては、民族に相当するような心理的紐帯を持ちうるとする立場と、民族に相当するような心理的紐帯がなくても統治空間の運営は可能だとする立場があり得る。前者の例が『想像の共同体』で知られるベネディクト・アンダーソンであり、後者の例が本書の著者エリック・タリアコッツォである。本書は、成員の国民としての意識ではなく、領域内で実施されている諸制度が様々なあり方で換骨奪胎されていることを含め、国家と社会の間の関係性と捉えることで統治空間を描こうとしている。

本書は、第4部以降で密貿易の現場で民族間の連携が行われたことを指摘し、その背景として植民地支配への抵抗という共通性を挙げている。これは、一見すると、領域で規定される人々が互いに共同体意識を育てていった過程を描いているとも理解できる。しかし、密貿易の現場に中国人、インド人、在地住民、オランダ人、イギリス人などが関わっていたことをもって民族間の連携があったとする本書の議論は、中国人やインド人や在地住民を所与の存在と見ることで、かえって各民族を固定的に捉えることになりかねない。商取引上の協力関係と集合的アイデンティティの結びつきは本書では十分に論じられていない。

これについては、本書の中国人やインド人に関する記述の中でわずかに言及されるプラナカンという概念が重要であるように思われる。プラナカンは、マレー／インドネシア語で「混血者」「地元生まれ」を指す。一般に

中国系を意味することが多いが、中国系以外にも用いられる。プラナカンとは、社会の周縁に位置づけられ、外部の文明との関係を維持した上で自らが属する場で自立を確保しようとし、その営みによって社会の主流派を包摂した新しい集合的アイデンティティの形成をもたらすという特徴をもつ³⁾。プラナカンに積極的に目を向けることで、個別に外部に開かれたあり方を維持した上で、混成社会が領域内で集合アイデンティティを形成している状況を捉えることができるだろう。

以上本稿で挙げた2つの点は、いずれも本書で十分に論じられているわけではないが、本書によって示唆された研究の方向性の例として捉えられるべきものである。本書は多くの読み手に学問的な刺激を与え、研究のさらなる活性化をもたらす可能性を秘めている。本書が多くの人に読まれ、様々な研究の方向性が提示されることが期待される。

(注)

- 1) 本稿では、本書を評する目的のため、民族を言語などの文化的指標で他と区別し得る人間集団とし、民族の構成員は互いに心理的紐帯があるものとしている。
- 2) 海上封鎖が現在もアチェで重要な意味を持っていることについては、西芳実「インド洋津波はアチェに何をもちたのか：「困り込み」を解くためのさまざまな繋がり方」『自然と文化そしてことば4 インド洋海域世界——人とモノの移動』、言叢社、2008年、pp. 22-32を参照。
- 3) 「野蛮な」ものとされた華人系プラナカンによるマレー語文芸がインドネシア・ナショナリズムに果たした役割については、山本信人「インドネシアのナショナリズム」池端雪浦ほか編『岩波講座東南アジア史7 植民地抵抗運動とナショナリズムの展開』、岩波書店、2002年、pp. 161-187を参照。海域東南アジアにおけるプラナカン概念については、山本博之「プラナカン性とリージョナリズム：マレーシア・サバ州の事例から」『地域研究』、第8巻第1号、2008年、pp. 49-66も参照されたい。

(New Haven & London: Yale University Press, 2005,
xvi+437 ページ)

(やまもと・ひろゆき 京都大学)